

屋久島における観光産業の発展とその空間的特徴

金高 文香*¹・フンク カロリン*²

*¹ 広島大学大学院総合科学研究科博士課程後期

*² 広島大学大学院総合科学研究科

The development of the tourism industry in Yakushima and its spatial characteristics

Fumika KANETAKA*¹ and Carolin FUNCK*²

*¹ Graduate Student, Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

*² Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

Abstract

Yakushima Island is an island registered as World Natural Heritage in 1993. Eco-tourism developed in Yakushima Island; especially mountain climbing to the “Jomonsugi” is very popular. The number of visitors to the island rose to about 400,000 people after it was registered. Yakushima Island is a famous destination for tourists as an island richly endowed with nature.

This is a case study about Yakushima Island, and the purpose of this study is to examine the characteristics and the form of development of the tourism industry in Yakushima Island and to compare it with the Tourism Area Life Cycle (TALC). For this study, interviews were conducted and data collected to analyze the actions and the awareness of the administrative organs such as Yakushima Town and Kagoshima Prefecture, and the residents who are involved in the tourism industry such as eco-tour guides and accommodation owners.

First, the internal factors and the external factors which impact development of the tourism industry were clarified. As the primary industry including forestry declined in Yakushima Island, regional development by tourism started and the tourism industry has developed. In the development process, the registration as World Heritage Site played a very important role in establishing eco-tourism and the guide industry. However, on the other hand, World Heritage has also become a factor causing concentration of tourists on the Jomonsugi.

As result of the interviews with actors in the tourism industry, it was seen that they aim for the realization of high quality tourism and the diversification of tourism attractions. It can be said that World Heritage which is an external factor of development is serving to produce internal factors of development on the island. Moreover, the development of eco-tourism in Yakushima Island has been supported by migrants from outside the island who work as eco-tour guides. They can be considered as external factors from the early stage of the development process, and

thus the difference from TALC became clear.

Next, the difference in development between each area inside the island or each tourism industry sector was analysed. The regional distribution of the tourism industry was analysed using member lists of the Yakushima Tourism Association and “Jûtaku Chizu”, a detailed map of all buildings. It shows strong patterns of concentration in Miyanoura and Anbo. Concerning accommodation facilities, we find more in the southern part of the island, where flat land is available and it is easier to settle for migrants from outside the island. Accommodation facilities’ location can be divided into three types: facilities in the core of settlements, on the edge of settlements and outside of settlements. A trend to offer cottages or whole houses for rent rather than rooms only could be observed; these include reused old houses as well as purpose-built new, small units.

As a result of the location analysis, it became clear that the tourism industry has not developed evenly across the island, and that certain sectors like guides and accommodation facilities have grown and diversified more than other sectors. The TALC therefore needs to be considered separately for specific locations and sectors within a wider tourist destination.

1. はじめに

1) 研究の背景

日本は1992年に「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」の加盟国となり、翌年に文化遺産として法隆寺地域の仏教建造物と姫路城が、自然遺産として白神山地と屋久島が登録された。それ以来、屋久島は日本の最も有名なエコツーリズム型観光地に発展したといえよう。

日本は豊かな自然、独自の植物相と動物相を有しているが、オーストラリアのコアラ、中国のパンダに相当する、観光者に魅力のある象徴的動物 (iconic animal) は存在していないか、あるいは認識されていない。その代わりに、エコ思考の観光者のまなざしを引きつけるのは、巨大な樹木である。屋久島は豊富な雨量に恵まれ、亜熱帯の海岸から冷帯の山頂部までの間に多種の植物が確認され、屋久島固有植物も少なくないが、数百年、数千年立っていると言われる巨大な樹木が主に観光の目的となっている。島への訪問者数は1969年の46,000人から1988年の122,149人、2007年の406,387人に増加し、それに合わせ、エコツアーガイドの人数、宿泊施設、レンタカー業者、土産商店、小規模な観光施設など、観光産業も急増した。しかし一方で、すでに1990年代半ばから登山

客の規制、ゴミ処理の問題など、観光者の増加に伴う課題が指摘されている (南日本新聞1995年4月18日、1996年3月3日)。このことは自然観光資源を中心に発達している観光地の場合、環境の容量限界に近づくことにより、発展が停滞する恐れがあることを意味している。

このように、屋久島は30年ほどで少数の登山者が訪れる秘境から、観光産業が様々な分野で発達し、環境問題も引き起こされている、日本有数のエコツーリズム観光地へと発展した。このような観光地の発展過程を分析するために、観光地理学では観光地発達モデルを参考にすることが多い。Butler (1980) により提案されたこの観光地ライフサイクルのモデル (Tourism Area Life Cycle, 以下 TALC) は、観光地が商品と同様にいくつかの段階を辿って発達していくことを強調している。このモデルは、観光地が「衰退」する、または観光地でなくなる可能性があることを指摘し、観光資源の適切な管理、観光地の総合的な管理が重要であるという結論を導いている。発展の段階としては数少ない旅行者による「探査 (Exploration)」, 地元住民が観光産業に興味を持ち始める「関与 (Involvement)」, 訪問者数が急増し、外部からの資本も投資し始める「開発 (Development)」, 既存構造の「強化 (Consolidation)」, 訪問者の収

容力、環境や社会の容量限界に近づいた場合の「停滞 (Stagnation)」という5段階に分けることができる。しかし、「停滞」から先は「衰退 (Decline)」, 「安定 (Stability)」, 「再生 (Rejuvenation)」という、三つの異なった方向がみられる。

Lagiewski (2006) がまとめたように、TALC を核とした数多くの研究が進められてきた。例えば、1つの観光地内において多様な観光産業の分野はそれぞれ異なった段階で存在することが指摘された (Johnston, 2006, p. 13)。また、地域住民の間でも、人口学的特性や観光への関与程度により、観光の影響と地域の発展段階に対する認識が異なる場合もある (Johnson and Snepenger, 2006, p. 235)。その他に、観光地内の空間的な発展差も想像できる。このように1つの観光地の発展を分析するに当たっては、その観光地内における認識の格差や発展の偏りを配慮し、そこから生まれる問題を把握する必要がある。

さらに Butler (1980) の説明では、観光地として発展する中で開発に関する決定権や、観光施設の所有と運営が、観光者が増えるとともに地域外の機関や業者に移動するとされている。しかし、観光分野における決定と運営の権利は地域内に残る事例も発表されている。そこで地域の行政体制、権力構造、歴史的発展の過程が関連し、その他にも、地域経済における観光の役割、資源の管理システムなど、地域の条件が発展に影響すると考えられる (Lagiewski, 2006, p. 44)。なお、ここでは詳しく触れないが、TALC の理論と事例研究について、Butler 2006a, 2006b を参考にした。

以上のように、数多くの観光地研究を通じて TALC の拡大が図られてきた。そこで本論文は、鹿児島県屋久島を事例に取り上げ、TALC を指標として参考にし、屋久島における観光産業の発展の特徴やその形態について明らかにすることを目的とする。具体的には、発展に影響する内部要因と外部要因を明らかにし、そして島内の各集落や各観光産業分野の間における発展の違いを分析する。

2) 研究対象と方法

屋久島は1993年に世界遺産登録されてから2007年までは観光者が増加し、その後、減少と増加を繰り返している。観光者の増加に伴い、観光産業の拡大、外部資金の導入、適正容量基準の設定を巡る議論など、観光地の発展段階の特徴が多くみられる。また、2007年の町村合併までは島に2つの自治体が存在しており、国立公園と世界遺産の管理には環境省、林野庁、鹿児島県などの外部機関が関わり、複数の主体が複雑に絡んでいるなかで観光が発展してきた。島の経済は林業がほぼ中止となり、観光産業へ依存するようになった (柴崎, 2005)。そして現在では、一部の観光スポットで適正容量の限界を超えるような事態が起きており、規制をかける段階に入った。このような特徴を踏まえ、屋久島は短期間で観光地の発展段階を辿り、各段階の課題、段階の移行に影響する要因を検討する上で適切な事例であるといえよう。

屋久島の観光に関する先行研究では、柴崎茂光による森林資源の利用と管理に関する研究 (柴崎, 2005; 柴崎ほか, 2008) や、屋久島の観光者数の推計を試みた研究 (柴崎, 2003) がある。その他では、エコツーリズムに関して多くの研究がなされてきた。その中でも、エコツアーガイドに着目した研究は多く (中島, 2007; 松本ほか, 2004; 田島, 2003)、それ以外の業種を含めた、観光産業全体に関する研究はほとんどなされていない。

本研究は屋久島に関する先行研究を参考にし、2009年、2010年、2011年のそれぞれ2月末から3月はじめに実施した3回の現地調査に基づいている。調査方法は行政機関と、ガイド、観光施設、宿泊施設、商店などの観光業者に対する半構造化インタビューが中心となっている。行政機関または民間の組織は、屋久島エコツーリズム推進協議会、世界遺産センター・屋久島自然保護官事務所、屋久島観光協会、屋久島環境文化村センター、屋久島環境文化村研修センター、屋久島町環境政策課、鹿児島県観光連盟、屋久島町商工会、屋久島町商工観光課、という9か所の機関で合計11回のインタビューを実施し、その上で統計資料などを収集した。観光産業ではガイド7か所、観光施設5か所、宿泊施設17か所、土産屋・商店・カフェ13か所、タクシー会社1か所、合計42か所でイン

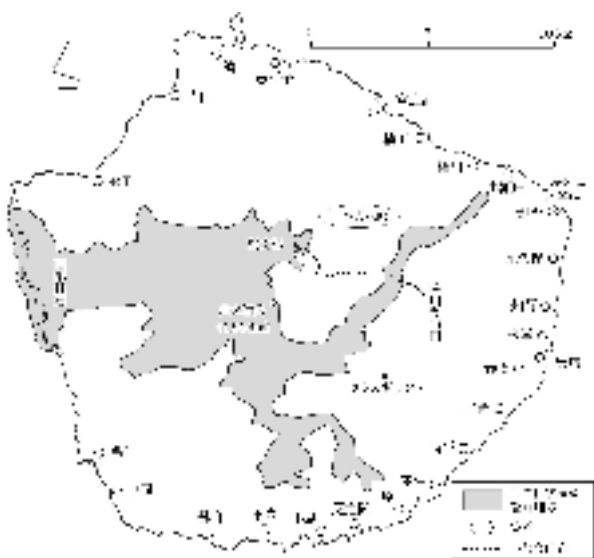
タビューを行ない、設立や就業の経緯、対象とする観光者の特徴と行動、屋久島における観光の変化、世界遺産登録の影響、観光地としての課題、屋久島の魅力と今後の観光地としての見通しについて質問した。本研究ではこの調査結果の一部を利用する。

以下、Ⅱでは TALC の各発展段階の特徴を踏まえ、屋久島の観光発展の推移をまとめる。Ⅲでは発展過程におけるキーポイントとして世界遺産登録とガイド産業の発展を取り上げ、発展の内部要因と外部要因について考察する。次にⅣでは、観光産業の発展に関する差異を考察するため、観光産業の全体的な特徴と、宿泊施設の分布状況を分析する。そして、Ⅴで屋久島における観光産業の発展の形態がどのような要因によって形作られているのか、Ⅳまでの考察からその特徴を明らかにする。最後にⅥで観光地発展の研究において重要な視点について、屋久島の事例から得られた知見を述べ、今後の課題を示す。

Ⅱ．観光の推移

1) 屋久島の概要

屋久島は、鹿児島県大隅半島の佐多岬から南方約60kmの洋上に位置する、周囲約130kmの島である。島の面積は約500km²に及ぶが、島の中心部から広がる山岳地帯が全面積の9割を占めており、

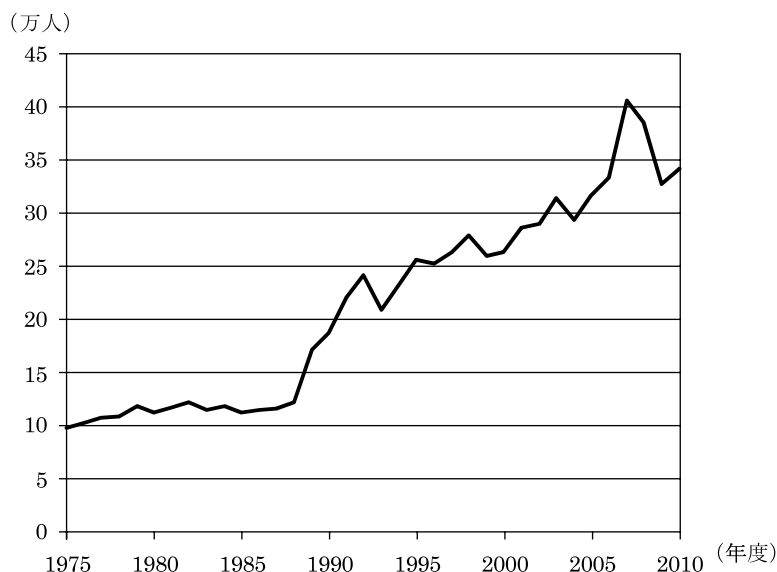


第1図 研究対象地域

海岸のわずかな平地に24の集落が形成されている(第1図)。屋久島の山岳地帯は、前岳と奥岳に区分される。前岳は沿岸近くの標高約1,000mの山々を指し、奥岳は前岳に囲まれた島中央部の急峻な山々を指す。奥岳には九州最高峰の宮之浦岳(1,936m)をはじめとする1,800m以上の高峰がそびえたち、島民は古くから畏敬の念を抱いてきた。奥岳地域は島民にとって神聖な空間であり、屋久島の山岳信仰の中心として位置づけられてきた。

屋久島では急峻な地形に加え、年間4,000～10,000mmという降水量の多さにより、特異な自然環境が育まれている。樹齢数千年の屋久杉をはじめとする巨木群や、沿岸部の亜熱帯植生から奥岳山頂付近の亜高山帯植生に及ぶ植生の垂直分布がみられるほか、多くの固有種や絶滅の恐れのある動植物が生息、自生している(鹿児島県環境林務部自然保護課, 2010)。こうした自然環境の特異性から、屋久島は1993年に白神山地とともに国内第一号として世界自然遺産に登録された。世界の遺産として認められた屋久島の豊かな自然は、現在、観光資源としても高い価値を有している。しかし、その森林資源の利用の歴史は、屋久島における森林伐採と開発の歴史と深い関わりを持つ。

屋久島では、江戸時代中期に屋久杉を年貢として薩摩藩に納めるようになってから本格的な森林伐採が始まり、明治時代以降は建築用の材木としての需要の高まりなどから伐採が進んだ。特に戦後復興期や高度経済成長期には大規模な伐採が行われ、屋久島の林業は最盛期を迎えた。1970年以降になると、自然保護の気運が社会的に高まり、国有林における国の施行方針も自然保護や国土保全に重点が移行していった。屋久島においても、自然休養林としてヤクスギランドや白谷雲水峡が設定され、森林資源を観光資源として利用する動きが進んだ(中島, 1998)。また、この時代はモータリゼーションの影響から、全国的な旅行ブームが起きた時代でもあり、島を訪れる観光者も多くなった。とりわけ、1966年に発見された島内最大の屋久杉である縄文杉は、マスメディアにおいて大きく取り上げられ、観光者の増加に大きな影響を及ぼした(鹿児島県保健環境部, 1992)。



第2図 屋久島の入込者数

資料：種子屋久観光連絡協議会のデータにより作成。

屋久島において観光の重要性が高まってきた様子は、屋久島への入込者数の推移からも窺える(第2図)。入込者数は右肩上がりに増加してきており、2007年には40万人に上っている。なお、この入込者数には島民の移動も含まれており、この内の約58-69%が観光者であると推定されている(柴崎, 2005, p. 42)。また、1993年の世界遺産登録以前に入込者数が増大していることも特徴的である。この背景には、1989年の高速船の就航により、観光者のアクセス利便性が向上したことがあげられる。

2) エコツーリズムの発展

現在の屋久島における観光は、豊かな自然資源を利用したエコツーリズムに最大の特徴がある。エコツーリズムが屋久島において初めて計画的に取り組みされたのは、鹿児島県が1992年に策定した「屋久島環境文化村構想」においてである。「環境文化」とは、人と自然との関わり合いの中で育まれてきた島の文化を表しており、環境文化村構想は「環境文化を戦略的イメージとして掲げた地域個性化の試み」(鹿児島県保健環境部, 1992, p. 5)として位置づけられている。エコツーリズムは、環境文化を地域資源として活用し、地域づくりや地域振興を進める上で大きな役割を持つもの

として推進されてきた。また、この構想の背景には林業などの一次産業の衰退から、観光によって地域経済を多様化しようという目的もあり、屋久島の世界遺産登録を目指す活動もこうした目的に結びつく形で展開された。

エコツーリズムの発展に実質的な影響を与えたのは、世界自然遺産への登録である。世界遺産登録は、屋久島の自然の観光市場における商品価値を高め、旅行会社等によるエコツアーの商品化が進んだ。こうした動きは、エコツアーガイドにも大きな影響を及ぼした。屋久島では、世界遺産登録以前から山岳登山の案内人として山岳ガイドが存在していたが、それは島民の副業として行われていた。世界遺産登録後はガイド活動が活発化していき、エコツアーガイドが職業として成立するようになった。現在では、ガイド全体の内の8割強が島外からの移住者であるとされており¹⁾、世界遺産登録後のエコツーリズムの発展において、移住者とその一翼を担ってきたことも屋久島の特徴の一つである。

また、2004年には屋久島が環境省の「国立公園等エコツーリズム推進モデル地区」に選定され、「屋久島地区エコツーリズム推進協議会(現、屋久島町エコツーリズム推進協議会)」が設置された。エコツーリズム推進協議会は、屋久島町を主

体とし、自然と観光に関連する行政機関や地元の経済団体を含めた15団体で構成されている。この協議会の目的は、地域資源の保全管理と地域振興のバランスが取れたエコツーリズムを確立することであり、屋久島のエコツーリズムの推進体制において中核をなす組織となっている。また、世界遺産登録以前から活動しているガイド業者へのインタビューによれば、この協議会が設置された頃から「エコツーリズム」という名称が屋久島において広く使われるようになったといわれており、エコツーリズムの名称や概念の浸透という側面においても重要な役割を果たしたと考えられる。

エコツーリズムの発展は、一方で観光活動による自然環境への負荷の問題を深刻化させた。山岳部の観光スポットでは多くの観光者が集中するため、し尿処理の問題や登山道の荒廃等が大きな問題となっている。特に縄文杉では、観光者の踏圧による根へのダメージが深刻化し、1996年には展望デッキが作られたほか、2008年からは縄文杉登山に最も利用されている荒川登山口周辺の車両乗入れ規制とシャトルバスの運行が行われている。さらに、現在、エコツーリズム推進協議会が中心となって縄文杉の入山者数を制限しようという動きがみられるが、入山者数の設定や規制の方法、地域経済への影響などについて様々な議論がなされている。

以上のことを踏まえ、次章では観光産業の発展過程におけるキーポイントとして、世界遺産登録とガイド産業の発展を取り上げる。

III. 観光産業の発展における特徴

1) 世界遺産ブランドの影響力

世界遺産が地域や観光地のブランドとして、観光市場において非常に大きな効果を発揮することは良く知られている（渡辺ほか、2008）。前述したように屋久島においては、世界遺産登録がガイド産業という新たな観光産業を生み出すほどの影響を与えている。旅行会社等は屋久島を「世界遺産の島」として紹介し、旅行商品を宣伝している。そうしたツアーの中には、世界遺産登録地域を訪問しないツアーも多く、世界遺産のブランド力を

背景に、登録地域外の観光資源であっても「世界遺産観光」に組み込まれるような観光空間が成立しているといえる。

世界遺産ブランドの観光的な利用は、旅行会社のような島外からの利用のみならず、島内においても盛んに行なわれている。島内の特産品販売店には「世界自然遺産」と表示されたお土産物が並んでいる。また、世界遺産の表示は、屋久島の玄関口となる屋久島空港や安房と宮之浦の港でもみられる。こうした表示は世界遺産が屋久島のイメージとして定着していることを表しており、屋久島に到着した観光者にとって世界遺産の島を訪れたことを最初に実感させるものとなっている。

屋久島町や屋久島観光協会による観光宣伝活動においても、世界遺産ブランドは大きな影響力を持つ。世界遺産登録後は外部からの取材依頼が殺到しており、観光宣伝のための費用はほとんど掛からないような状況であるという²⁾。しかし、こうした状況は観光宣伝活動の受動性を表すものであり、観光に関する情報発信の多くが外部の主導で行なわれているといえる。こうした中、インタビュー調査では、観光情報や地域のイメージの画一化を問題視する声や島の観光産業の受動的な形態に対する不満の声がガイドや宿泊施設などの観光産業従事者から多く聞かれた。前述したエコツーリズム推進協議会においても、地元が主体となったエコツーリズムの確立が目指すべき方向性としてあげられている。

また、インタビュー調査の結果、多くの行政機関や民間の観光産業従事者では、屋久島を訪れる観光者はマナーが良く、環境意識が高いと考えられており、そうした島に対する高い期待に応えたいという認識を持つことが分かった。このことから、世界遺産ブランドが島内の観光産業関係者にとって、そのブランドに相応しい観光を提供しなければならないというプレッシャーとなっているといえる。さらに、このような認識を持つ人達は、持続可能な観光や質の高い観光を志向しており、世界遺産ブランドが島の観光のあり方に関する観光産業関係者の意識に影響している一面があると考えられる。

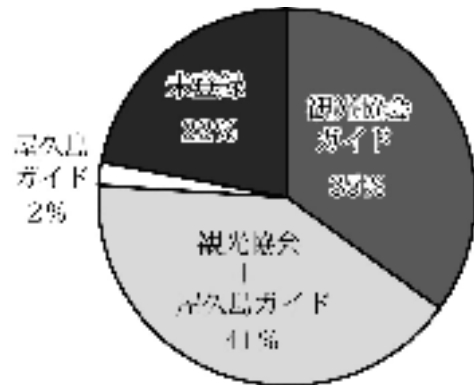
2) ガイド産業の発展と問題点

世界遺産登録を契機とし、エコツアーガイドが観光産業の一つの業態として確立されたことは屋久島の大きな特徴である。真板ほか（2010）によれば、ガイド業者の数は1996年頃には20に満たなかったが、2003年には44の業者となっており、その数が増大している。現在では、約200人のガイドが活動しているとされる³⁾。

一方、ガイド産業が発展し、ガイド活動が活発化するのに連れて、地域社会では様々な問題が生じてきた（中島，2007）。エコツーリズム推進協議会によると、住民からは、生活用水の汚染を懸念する声や農作業などの生活上の不便を訴える声があがったという。さらに、信仰の対象である山岳部が観光地として利用されることに対する不満も出てきた。また、ガイド業者の質の悪化も問題化してきた。地域資源の利用にあたってのマナーの悪さが指摘されるようになったほか、救命救急やガイドの解説内容に関する専門的な知識の不足が問題化した。そうした状況の中、ガイドの利用者からもツアーの料金や内容等に関するクレームが多く寄せられるようになっていった。

こうしたガイド産業に関わる諸々の問題を改善するため、エコツーリズム推進協議会は2006年に「屋久島ガイド」というガイド登録・認定制度を導入した。この制度は、ガイドの共通ルールの作成とその徹底、ガイド間や地域との連携の強化、安全面及びガイドの知識・技術面でのレベルアップを主要な目的としており、ガイドの質の向上に総合的に取り組もうとするものである。屋久島ガイドには、救急法や屋久島の自然に関する講習会の受講、2年以上の島内での居住歴などの登録基準が設けられており、3年毎の更新制となっている。2009年4月には制度導入後、初めての更新が行なわれ、登録者数は更新前の116人から86人に減少した。

また、屋久島ではエコツーリズム推進協議会とは別に、観光協会に会員として登録しているガイドも存在するが、観光協会のガイドは講習会の受講などの登録基準や更新の必要はなく、比較的容易に登録することができる。第3図は、ガイドの登録の割合を示している。観光協会ガイドと屋久



第3図 ガイドの登録状況

注：ガイド全体の数を200人として算出した。

島ガイドの割合は、それぞれ76%と43%になっている。41%のガイドは両者に重複して登録しており、ほとんどの屋久島ガイドは観光協会に登録している。屋久島ガイドの制度に対しては登録の利点が少ないなどの意見が出ており、登録者数をどのように増加させていくかが、今後の大きな課題となっている⁴⁾。

屋久島のガイドには、個人で活動するガイドと、ガイド団体に所属しているガイドがいる。島内で最初に設立されたガイド団体は屋久島ガイド協会（1989年設立）と、そこから独立した YNAC（1993年設立）である。このようなガイド団体はカヤック、ハイキング、ダイビングなどの多様なエコツアーを提供しており、旅行会社と提携し、団体観光者を受け入れている。一方、個人ガイドの中でもガイド団体と提携し、ガイドの依頼を受けるものもある。個人ガイドはガイド業を季節営業や兼業で行ない、活動内容を特化している場合も多い。また、屋久島で活動しているガイドの8割は移住者であるとされているが、2007年時点の屋久島ガイドの登録者名簿を確認すると、屋久島出身者は116人中36人に止まっている。そして、2000年以降にガイドを始めた人は70人に上っており、女性ガイドは17人となっている。また、ガイドの中には、環境や生態学の分野に関する専門的知識や野外レクリエーションの豊富な経験を持つものも多い。

ガイド業者へのインタビュー調査によると、ガイドツアー利用者の客層は20、30代の個人客と中高年の団体客が多く、女性が6割くらいを占めて

いる。人気のツアーコースは縄文杉と白谷雲水峡であり、特に白谷雲水峡は1997年に公開されたアニメ映画「もののけ姫」の影響で利用者が急増した。また、世界遺産登録後はガイドツアーに環境学習やエコツアーリズムとしての要素が求められるようになったという。島外から移住してきたガイドは、このような観光者の需要の変化と増加に対応する上で重要な役割を果たしてきたと考えられ、ガイド産業の発展に大きく貢献したいえる。

世界遺産登録を契機として発展してきたガイド産業であるが、その中でも縄文杉の存在は非常に大きな影響を与えてきた。ガイドの中には、縄文杉のガイドで生計を立てているものも多くいる。その一方、観光のシンボルとなった縄文杉にはガイド業者の中でも批判的な目が向けられている。インタビュー調査では、自然環境の負荷への懸念や島の多様な魅力が伝えられないこと、そして多大な人気ガイドの質の悪化を招いたといった認識がみられ、中には最も人気のある縄文杉の日帰り登山を取り扱わない業者もいた。

近年では、縄文杉への依存度を低下させるような動きも広がっている。西部林道等のツアーコースの利用が増えてきているほか、島の歴史や文化をエコツアーに取り入れようとする動きもみられる。さらに、最近の癒しブームに合わせたツアーの設定なども行なわれている。また、同じ縄文杉登山でもゆっくりと満喫できる一泊ツアーや混雑する登山ルートを変更するなど工夫を凝らした縄文杉ツアーを行なうガイド業者も増えている。

しかし、新たなツアーコースが開発されることに対し、ガイド業者の中には自然環境への影響を懸念するものもいる。こうした認識を持つガイドの中には、島の魅力を掘り起こしたいという思いと、新たな環境負荷を招きたくないという思いが交錯しており、ツアーコース開発に関するジレンマが存在している。

IV. 観光産業の空間的特徴

1) 観光産業の構成と特徴

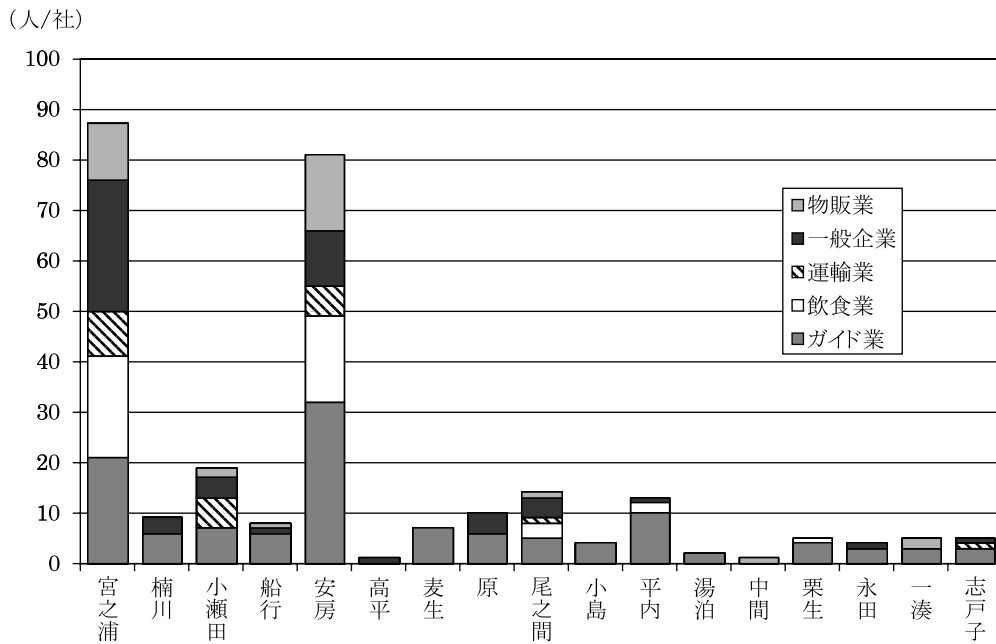
観光産業における空間的特徴を明らかにする上で最も良く用いられる手段は、宿泊施設の分析で

ある。それは、実態が把握しにくい観光の中で宿泊は具体的な定点として捉えることができる、観光の明確な特徴の一つだからである（ピアス、2001）。本章では、宿泊施設について、その分布状況と宿泊施設の経営者へのインタビュー調査からどのような空間的特徴があるのか分析し、屋久島における観光産業の発展の様態を明らかにする。

まず始めに、宿泊施設に関する分析を行なう前に、屋久島の観光産業の全体的な特徴を屋久島観光協会の会員名簿（2009年現在）をもとに考察する。なお、島の人口は2010年10月に13,592人で、26集落に分布しているが、そのうち2集落は口永良部島にある。本論文は口永良部島を対象外とするため、24集落における観光の発展とその空間的な特徴をとりあげる⁵⁾。

観光協会の会員は宿泊業、飲食業、レンタカーやタクシーなどの運輸業、特産品や工芸品販売などの物販業、エコツアーのガイド業、そしてその他の様々な企業が含まれる一般企業の6つの業種によって大別されており、それぞれの業種による部会が構成されている。各部会別の会員数は宿泊部会が131会員と最も多いが、ガイド部会も119会員と多くなっており、島の観光産業におけるガイド業の重要性が窺える。ガイド部会の会員にはガイド団体と個人ガイドが含まれており、個人ガイドは個人で興した会社名で加盟している場合もあるが、個人名での加盟が多い。また、飲食部会にレストランなどの他に弁当販売店が含まれていることも特徴的であり、観光協会のホームページにおいても弁当販売の情報が提供されている。これは、登山目的の観光者の多くが弁当を必要とするためであり、屋久島の観光産業に特有なことといえる。

会員名簿の情報を住所別に18の区域に分け、会員の所在地の分布状況を分析した（第4図）。最も会員数が多かったのは宮之浦であり、次に安房が続いている。この2区域は会員数が突出しており、屋久島における観光の中心地であることが顕著に現れている。その他では小瀬田、尾之間、平内で比較的会員数が多いが、2区域との差は歴然としており、島内の観光の発展が集中的に進んできたといえる。宮之浦と安房を業種別に比較して



第4図 観光協会会員の業種別分布状況

注1：宿泊業を除く。

注2：「楠川」は楠川を、「小瀬田」は長峰を、「船行」は永久保を、「安房」は松峯、春牧、平野を含んでいる。

注3：該当する会員がない吉田集落を除いている。

資料：屋久島観光協会提供の資料により作成。

みると、宮之浦では一般企業の会員が多く、安房ではガイド業が多くなっていることが分かる。このことから、宮之浦は島内の行政上や社会的な中心地としての特色がより強く、安房は観光的な特色の強い区域であるといえる。ガイド業に注目してみると、安房に最も会員が多く、ガイド産業が集積している様子がうかがえる。これは荒川登山口が近く、縄文杉登山の拠点となっていることが影響していると考えられる。また、ガイド業は宮之浦と安房以外の区域にも会員が分散しており、観光産業の中で活動領域の広い業種であるという特徴を示している。

2) 宿泊施設の発展と空間的分布

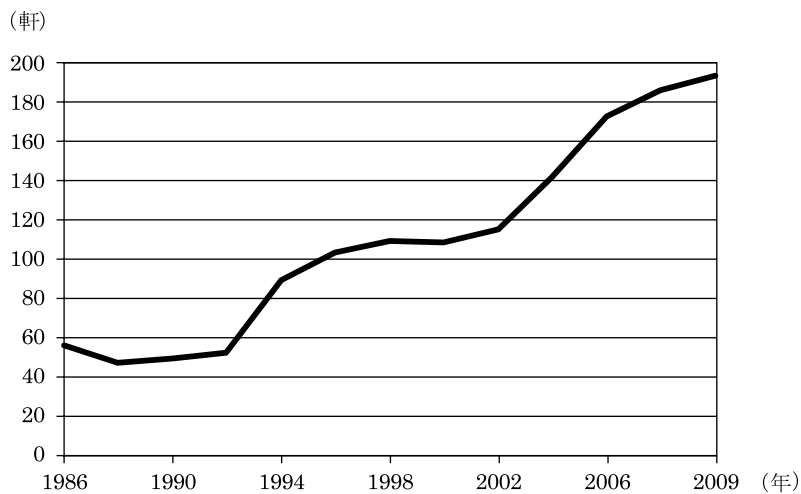
次に、宿泊施設の発展をみたい。宿泊施設の増加は特に1994年と2004年で目立つが、さらに近年も宿泊施設の増加が続いている（第5図）。

宿泊業の構成と特徴を第1表でまとめた。この表は、宿泊部に属する宿泊施設について観光協会ホームページの掲載内容（2011年8月現在）をもとに、定員と基本料金及び施設の種類の情報を

整理したものである。施設の種類の屋久島町商工会会員名簿を参考にし、各施設を簡易宿泊施設と旅館・ホテルの2種類に分類した⁶⁾。宿泊施設の全体的な傾向としては、比較的小規模で安価な宿泊施設が多いことがあげられる。定員19人以下で基本料金が4千円未満の簡易宿泊施設は40件あり、全体の約30%を占めている。最も多いタイプの施設は、定員10~19人の簡易宿泊施設で、その割合は40%にのぼる。定員100人以上の大型の旅館・ホテルは5件あるが、料金はいずれも1万円以上と比較的高価であり、リゾート型の施設として団体客などを受け入れていることが分かる。

屋久島にはこのように数多くの宿泊施設が立地しているが、集落によりその数と特徴が異なる。また、集落内での立地状況も人家が密集している「集落中心部」と、中心部から少し離れた少数の人家が建ち並ぶ場所か、県道沿いに立地している「集落中心部外縁」、そして人家が散在する「集落周縁部」という3つの立地タイプに分類できる。

宿泊施設の多くは屋久島観光協会の会員として観光協会が定期的に発行する「宿泊のご案内」と



第5図 宿泊施設数の推移

注：営業許可の数であるため、実際に営業を行なっている施設数とは異なる。
資料：鹿児島県観光課，生活衛生課のデータにより作成。

第1表 観光協会会員の宿泊施設のタイプ

(単位：軒)

定 員	施設分類	4千円未満	4千～ 7千円未満	7千～ 1万円未満	1万～ 2万円未満	2万円以上	総 計
10人未満	簡易宿泊	15	10	4	1		30
	旅館・ホテル	1	1	1			3
	小 計	16	11	5	1		33
10～19人	簡易宿泊	24	16	14	1		55
	旅館・ホテル		1	3			4
	小 計	24	17	17	1		59
20～39人	簡易宿泊	5	9	6	1		21
	旅館・ホテル		2	7			9
	小 計	5	11	13	1		30
40～69人	簡易宿泊		1		1		2
	旅館・ホテル			2	3	1	6
	小 計		1	2	4	1	8
70～99人	簡易宿泊			2			2
	旅館・ホテル						
	小 計			2			2
100～199人	簡易宿泊						
	旅館・ホテル				3		3
	小 計				3		3
200人以上	簡易宿泊						
	旅館・ホテル				1	1	2
	小 計				1	1	2
	総 計	45	40	39	11	2	137

資料：屋久島観光協会宿泊情報「宿泊のご案内」(2011年8月)

いう資料に場所別に記載されている。

調査方法としてはまず、2008年の住宅地図と観光協会宿泊情報「宿泊のご案内」2010年9月3日で宿泊施設を確認した。その変化を把握するため、2011年8月19日の宿泊情報と、1998年の住宅地図と比較した。さらに、屋久島の情報を提供しているホームページ⁷⁾と、エコツアーガイドの宿泊情報ページ⁸⁾で情報を確認した。

2008年の住宅地図では136軒の宿が確認できたが、そのうち114軒が2010年8月時点で観光協会の会員となっている。逆に、観光協会会員の宿は138軒あるが、そのうち24軒が2008年の住宅地図に載っておらず、そのほとんどが近年設立されたと推定できる。24軒の内、1軒の場所は住宅地図の範囲外である。また、3軒は住宅地図には個人住宅として、4軒は杉工芸品店、ガイド事務所、レストランなどのような商店や事務所として記載されているため、その後宿に移行したと判断できる。1軒は住宅地図では安房の中心部に立地しているが、その後郊外に移転した。なお、移転について、民宿のホームページでは、2005年に行ったという情報が記載されているため、住宅地図の情報は主に2005年以前の情報だと思われる。また、1軒は、民宿として記載されているが、施設名が変わった。その他の14件は現在の立地場所に建物として住宅地図に記載されていないため、新築されたと推測される。

その他に、住宅地図と観光協会とは別に、屋久島情報サイトから確認でき、宿のホームページも運営され、最近1年以内に開業した宿が5件あり、宿泊施設の増加が続いている。

逆にその減少についてみると、1998年の住宅地図に載っていたが、その後、宿ではなくなって、2008年の地図では個人住宅や空き屋に変わった宿は4軒が確認できた。また、2008年住宅地図に宿として確認でき、2010年時点で観光協会の会員であったが、2011年には観光協会の会員ではなくなった宿は2軒あった。そのうち、1軒は更新されているホームページが存在し、2010年に安房中心部に2番館をオープンしており、一般的な宿泊予約サイトにも掲載されているため、営業中であると判断できる。2008年住宅地図に記載されていた

が、観光協会会員ではなくて、その他の屋久島の情報サイトや、楽天などの予約サイト、一般検索でネット上全く確認できなかった2軒と、ネット上の一般アドレス帳に載っているがその他の情報がない宿が2軒あり、営業していないと思われる宿が4件あった。

結果として、住宅地図(2008年)、観光協会宿泊施設名簿(2010年)、屋久島の情報ホームページから確認できた165軒の宿のうち、5軒が営業していないと思われ、160軒の宿泊施設が営業中であると推定できる。

なお、数件の宿のホームページでは、休業した、再スタートしたなどという記載があったため、オーナーや経営者の状況でしばらく営業しない宿や季節的に休業する宿もあることが分かる。また、観光協会の「宿泊のご案内」に載っていないが、経営者自身が会員であるか、数件の宿を経営し、そのうち一部だけリストに含まれているようなケースもみられた。

第2表では、集落別の軒数、宿の種類、立地場所について165軒の情報をまとめた。宿の種類としては、素泊まりと、そうでない宿に分けたが、ここでいう素泊まり宿は、料理を原則として提供しないことを意味する。立地場所は前述した「集落中心部」、「集落中心部外縁」、「集落周縁部」という3タイプに分類した(第6図)。

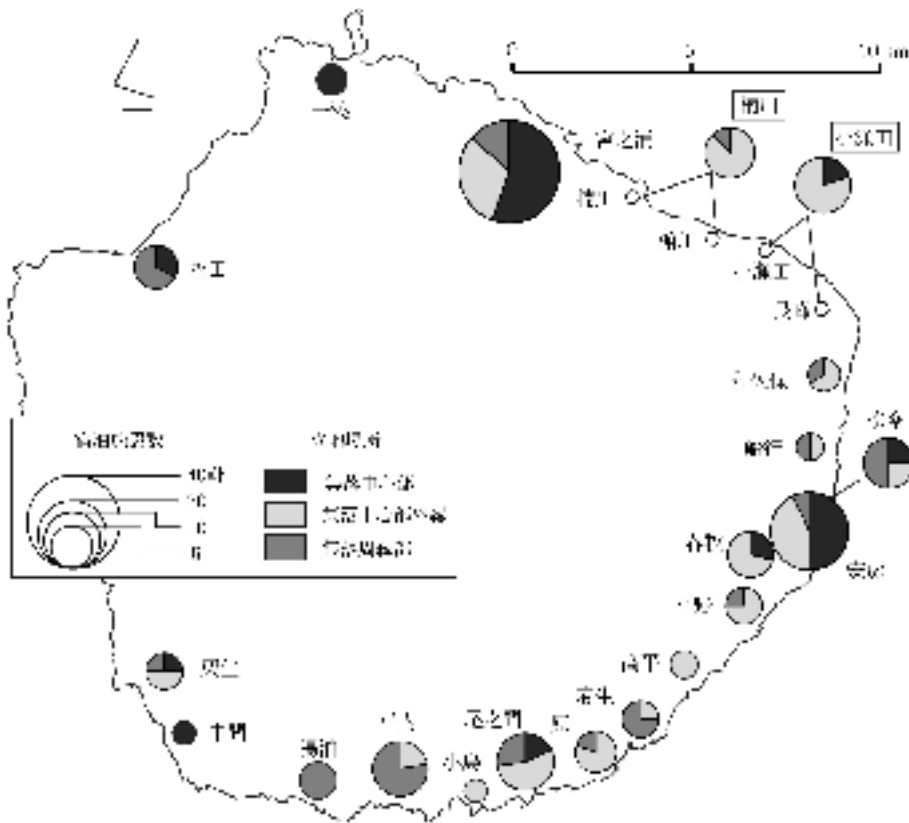
集落別の軒数を見ると、島の中心地である宮之浦(46軒)と安房(29軒)に最も多く、その次に尾之間、小瀬田と平内にもそれぞれ10軒ほど立地している。一方、北部の吉田と志戸子の2集落には、宿泊施設がみられない。旧上屋久町に73軒、旧屋久町に96軒が立地し⁹⁾、南部の方が多くなる。そこにはいくつかの要因が関係する。屋久島のガイド業には、他地域から移住した人が多く関わっていることが、先行研究でもよく指摘されているが(松本・田代・大西, 2004; 藤木, 2004)、宿泊施設の経営についても、インタビュー調査や、各施設のホームページにおける自己紹介から、同じ事情を確認できた。島の南部の方が平地が広く、移住者が家を建てるための敷地と、それを開発する業者、または移住を支援するNPOが存在する。平内のように積極的に移住者

第2表 集落別宿泊施設の分類

場 所	宿泊施設 (軒)	定員 (人)	素泊まり	立地場所			集落人口 (人)	人口100人 当たり軒数	人口100人 当たり定員数
				集落中心部	集落中心部外縁	集落周縁部			
永田	6	168	0.0%	33.3%	0.0%	66.7%	544	1.1	30.9
一湊	3	42	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	872	0.3	4.8
宮之浦	45	1058	35.6%	55.6%	31.1%	13.3%	3241	1.4	32.6
楠川	8	62	50.0%	0.0%	87.5%	12.5%	572	1.4	10.8
小瀬田	10	236	40.0%	20.0%	80.0%	0.0%	819	1.2	28.8
船行	2	32	50.0%	0.0%	50.0%	50.0%	265	0.8	12.1
永久保	3	36	33.3%	0.0%	66.7%	33.3%	189	1.6	19.0
松峰	8	206	37.5%	25.0%	25.0%	50.0%	544	1.5	37.9
安房	28	459	46.4%	50.0%	42.9%	7.1%	1176	2.4	39.0
春牧	7	113	14.3%	28.6%	71.4%	0.0%	886	0.8	12.8
平野	4	100	25.0%	0.0%	75.0%	25.0%	267	1.5	37.5
高平	2	30	50.0%	0.0%	100.0%	0.0%	161	1.2	18.6
麦生	4	73	25.0%	0.0%	25.0%	75.0%	239	1.7	30.5
原	5	77	20.0%	0.0%	80.0%	20.0%	462	1.1	16.7
尾之間	11	451	9.1%	18.2%	54.5%	27.3%	855	1.3	52.7
小島	1	6	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	192	0.5	3.1
平内	9	158	22.2%	0.0%	22.2%	77.8%	664	1.4	23.8
湯泊	4	57	25.0%	0.0%	0.0%	100.0%	217	1.8	26.3
中間	1	6	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	270	0.4	2.2
栗生	4	54	25.0%	25.0%	50.0%	25.0%	561	0.7	9.6

注1：集落人口は2005年の国勢調査を利用した。

注2：2010年の宿泊リストでは、「小瀬田」は長峰、「楠川」は楠川を含み、リストに掲載がない吉田、志戸子集落を除いて20集落となる。



第6図 集落別宿泊施設の立地状況

向けの情報を発信する集落もある。つまり、島の南部の方が、宿泊施設の新築や、移住者による宿の経営が容易であると思われる。

定員についてみると、全体で確認できた定員数が3,220人で、旧上屋久町に1,362人、旧屋久町に1,858人の収容力がある。つまり、定員数についてさらに両地域の格差が大きいが、それには尾之間に最も定員数の多いホテルが立地していることが影響している。定員の情報のない宿泊施設が20軒あるが、いずれも小さな施設で、平均として、10人前後であると思われる。

各集落における観光の重要性を評価するために、宿泊施設と定員数を人口と比較した。人口100人当たりの宿泊施設が多い、つまり施設密度が高い集落は安房、湯泊、麦生、永久保の順となり、いずれも南部の集落である。一湊、中間、小島、栗生には少ないが、小島以外は主な観光地や中心地から離れた場所となる。人口当たりの定員数を見ると、収容力の大きいホテルや、中規模の宿泊施設が立地している尾之間、安房、松峰、平野、宮之浦に多い。定員数の少ない集落は、施設密度の結果と一致している。

次に、素泊まりの分布をみると、宮之浦から安房までの間にその割合が33-43%と高く、レストランや商店が集中するこの地域では宿が食事を提供しなくても観光者が困らないことが反映されている。一方、麦生以南の集落では、25%以下の割合となり、宿泊施設が食事の主な提供者となる。

集落との立地関係についても分析したが、集落中心部に立地する宿が55軒、集落中心部外縁に立地する宿が73軒、集落周縁部に立地する宿が41軒となった。ここでも地域により異なった傾向がみられる。集落の中心部に宿泊施設が多い集落は一湊、中間、宮之浦、安房の順となるが、建物の多い中心地か、建物がまとまった集落である。集落の外部に宿泊施設が多く立地する集落は楠川、小瀬田、永久保、春牧、平野、原となっているが、原以外は集落内の人家が比較的分散している共通点がみられる。永田、船行、麦生、平内、湯泊では集落から離れた宿が多い。永田の場合は、観光スポットである海岸沿いに集中するため、集落から離れた立地となる。船行集落は海岸や県道から

離れているので、宿は県道周辺に分散する。麦生、平内、湯泊は周辺が広く、新しい住宅や宿が開発されることに適している。

各宿泊施設の情報インタビュー調査や、各宿のホームページから確認し、設立年と経営者の出身地についても一部の情報が得られた。設立年については33軒確認できたが、そのうち3分の2が2000年から開業した新しい施設である。戦前から3軒、1990年以前から3軒、1990年代5軒、2000年から2004年の間が9軒、2005年以降が13軒であった。

経営者については屋久島出身が12軒、屋久島島外出身の個人経営が10軒、島外資本が5軒という結果が得られたが、後者のうち1軒が、営業していないと思われる。なお、特に小規模の施設は宿泊業を農業、ガイド業、レストラン、不動産業、レンタカー業、弁当屋などという他の産業活動と組み合わせて営んでいる場合が多い。

宿泊施設の役割が重要で、人口の割に軒数や定員数が多く、新しい宿も目立つ集落としては空港のある小瀬田、安房とその周辺（松峰、平野）、平地の多い麦生、尾之間、平野があげられる。永田と湯泊にも、人口の割に収容力が高い。その一方、宿がないか、少ない集落が島の北部と西部林道に近い場所にある。レンタカーの増加により観光者の行動範囲が広がったが、それでも、主な観光地や登山口に近しい地域、利便性の高い地域に宿泊業が集中しているといえよう。

住宅地図、宿泊施設が公開している情報やインタビュー調査の分析結果（第3表）を合わせると、ガイドだけではなく、宿泊施設経営者にも移住者が少なくないことが明らかになった。宿泊施設数の増加には、このような移住者の存在も影響していると考えられる。また、各集落の中心部やその周辺に立地している場合、空き屋になった家や、子どもが独立した後に利用しなくなった部屋を活かした、再利用型の宿が目立つ。集落の外部や完全に離れたところの施設は、宿を目的に新築された傾向が見られる。両方のタイプには、一軒を丸ごと貸し出す宿が増加し、前者の場合は小さな空き屋、後者の場合コテージ風の新築建物を利用している。レンタカーを利用する観光者が増え、行

第3表 インタビュー調査対象の宿泊施設リスト

宿泊施設	設立経緯	オーナーまたは経営者	設 備	場 所
A	国民宿舎の後地	職員43人	ホテル	尾之間
B	ゼネコンの仕事をやめて島に 来たかった	東京出身；親夫婦でスタート； 現在息子家族が主に経営	宿として新築；その後コテ ジタイプの部屋を増設	尾之間
C	総合保養地域整備法の鹿児島 県計画の一部	職員100人	ホテル	尾之間
D	屋久島に住みたくて；ペン ションにした特別な理由はない； 民宿は島内の人が経営し ていることが多い	大阪出身；夫婦で経営	宿として新設；ペンション	平 内
E	年をとったら、暖かい南の島 に行きたかった；金儲けが目 的ではないので、ユースホス テルにした	東京出身；定年をすぎてから 移住	退職金で宿として設立	平 内
F	不明	屋久島出身，Uターン；杉工 芸をして，宿泊客に販売；年 をとったからもうそろそろ宿 をやめたい	民家	中 間
G	これまでは自分だけ事業して いたので，奥さんにも何か事 業をさせたかったから	屋久島出身；焼酎会社の取締 相談役；民宿経営は奥さんと 娘	宿として建設；自分の山の木 材を使用；内装に杉を多く使 用	永 田
H	父親が事業を始めた；雑誌に 載り，流行った；息子が後を 継いだ	屋久島出身；家族経営；1世 代目社長；奥さんが料理；2 世代目運営；パート10人ほど	古い民家3軒を島内から移築 した	永 田
I	トッピーの出航と同時	不明	民家を利用	宮之浦
J	自家の近くに帰って，のんび り暮らそうとした	屋久島出身；Uターン；奥さ んが主に運営（元看護婦）	宿として1軒を新築（農業振 興地を利用）	安 房 （春牧）
K	商店を移転して，それで空き 屋になった建物の利用方法を 考えて，知り合いに素泊まり 民宿を勧められた	不明	空き屋になった1軒	安 房
L	住むために貸した人が出てい たので，空き屋になっていた； 一ヶ月通しよりは，宿とし て貸したほうがいい	屋久島出身；建築家が次いで に経営；息子がガイド	住むために貸していた1軒を 利用；建築士なので，宿にな るための改装を自分でした	小瀬田
M	島に旅行したときに知り合い になった人から，経営者を捜 しているという情報を聞いた	高知出身；女性；経営のみ； オーナーは別にいる	旅館として建築；古いので自 分で改装した	宮之浦
N	江戸時代からの伝統がある； 銀行の紹介で現オーナーが購 入した	屋久島出身	昭和56年ごろのコンクリート の建物；少しづつ改装	宮之浦
O	宿をやりたいから役場を早め にやめた	屋久島出身だが，親は移住 者；夫婦で経営	宿として新築	宮之浦
P	経営している飲食店の2階が 空いていた	屋久島出身；Uターン	飲食店の2階を利用	栗 生
Q	他の事業をやめた後に民宿を 始めた；喫茶店などもやった が上手いかなかった；素泊 まりの民宿にした	屋久島出身；Uターン	民宿として建築；喫茶店が増 設された	栗 生

注：「不明」部分は，質問の意図が正確に伝わらなかったことなどにより，明確な回答が得られなかった。

動範囲が広がったことと、島では商店やレストランが増加したことにより、このような、観光者が他の利用者や経営者に配慮しないで気軽に利用でき、経営者にとって手間や人手がかからない宿泊施設が増えたと思われる。なお、外部資本のホテルでも、国民宿舎の跡地に建設された「再利用型」と、集落から離れたところで観光者に別世界を提供する「新設型」が確認できた。

宿泊施設の増加が目立つようになった90年代から20年あまり立ち、世代交代や経営者の交代がみられるようになった。屋久島出身経営者の場合だけでなく、定年か、それに近い年で宿の経営を始めた移住者の場合も次の世代が経営を引き継ぐ例があった。一方、宿泊施設の営業が負担になり、そろそろやめたいという話しも聞いた。外部資本が建設したホテルでも、廃止や経営者交代がみられる。宿泊施設の世代交代、廃墟を防ぐ仕組みが今後の観光産業の重要な課題となる。

V. 観光産業の発展における構造的特徴

以上の考察を踏まえ、屋久島の観光産業の発展がどのような形態をもつのか、その構造的な特徴をまとめる。

屋久島では林業を始めとする一次産業の衰退を背景として、観光による地域振興が取り組まれ、観光産業が発展してきた。その発展過程において世界自然遺産への登録は、ガイド産業を新たな観光産業として確立させるなど、非常に重要な役割を果たした。世界遺産登録がもたらした様々な影響の中でも屋久島において特徴的なことは、エコツーリズム型の観光地として発展したということである。世界遺産登録やその後のエコツーリズム推進協議会の設立は、単なる自然観光ではない、環境学習的な要素を含むエコツーリズムの発展を後押しした。さらに、それは環境文化村構想と結び付き、ある種の理念性を持った観光が推進されてきたということが、屋久島における観光の発展の素地となっている。

島内で観光産業に従事する人の中に、移住者が多く含まれているということは、先行研究でよく

言及されているが（藤木，2004，p. 101，関根久雄，2005，p. 62），本研究のインタビュー調査においてもそうした状況がみられた。特にガイド業では、移住者の全体に占める割合が非常に高くなっていることが特徴的である。移住者はエコツーリズムやガイド業の発展に大きく貢献してきたといえ、こうした移住者の存在は発展の外部要因として考えられる。また、ガイド業の発展過程では、世界遺産登録以前の発展の初期段階から移住者が関わっており、Butler（1980）のモデルとの違いがみられた。Butlerは、地元住民による「関与」を外部資本による「開発」の前の段階として説明しているが、ガイド業はこの逆の発展過程を辿っている。無論、移住者を外部資本として位置づけることはできない。しかし、移住者が観光者の需要に対応し、ガイド業の発展の基礎を築いたことは、その後の住民による「関与」を導いており、外部要因としての移住者の存在はガイド業の発展過程において非常に重要な役割を果たしたといえるだろう。

世界遺産に対する観光産業関係者の認識を考察すると、そうした認識が観光の発展にも影響を与えていることが分かった。インタビュー調査の結果、官民に関わらず、関係者の多くが「世界遺産の島」を訪れる観光者の高い期待から、世界遺産のプレッシャーを感じていた。世界遺産のプレッシャーは、持続可能な観光や質の高い観光への志向性を強めている一面があると考えられ、こうした認識は今後の発展の方向性に影響を及ぼす可能性がある。また、世界遺産登録により、屋久島では世界遺産や縄文杉が地域のイメージとして定着し、多くの観光者を集めているが、こうした集中的な状況に違和感を抱く人も多くなっている。ガイド業においては、縄文杉登山をめぐる新たな動きがみられ、ツアーコースの多様化が進んでいる。このような観光の魅力の多様化を目指す動きは、観光産業の発展過程における新たな変化として位置づけられるだろう。世界遺産に対する観光産業関係者の認識やその動きは、発展の外部要因に反応した地域からの変化という特徴を持っている。つまり、世界遺産という発展の外部要因が、島内において内部要因を生み出す働きをしているとい

える。

観光産業の空間的特徴について考察した結果、島内の観光産業の発展には空間的な偏りがあることが分かった。観光産業の空間的な分布状況を見ると、島の全体的な特徴として宮之浦と安房に集積がみられ、他の地域との発展状況の差が非常に大きくなっていった。さらに宿泊施設の分析では、観光産業の重要性の高い地域とその特徴を明らかにした。これにより、島内における観光産業の発展は主要な観光地や登山口に近く、利便性が高いことがその要因となっていることが明らかになった。

第2図と第5図で示したように、島内への入込者数は増加傾向が次第に落ち着いてきている一方で、宿泊施設の増加は続いている。このような発展のずれともいえる状況は、観光地の全体的な発展との間や各産業分野の間において、発展度合いに差異が生じていることを示唆している。研究の背景で述べたように、多様な観光産業の分野はそれぞれ異なった発展段階で存在していることをJohnston (2006) は指摘しているが、そうした発展の非同時性は、屋久島においても発展の一つの特徴として現れているといえる。また、新しい宿泊施設の開設が進む一方で、インタビュー調査では世代交代や経営者の交代が行なわれた施設もみられ、過渡期を迎えている状況が確認された。このような発展の二面的な状況は、宿泊業の中で発展段階が異なることを示しており、各産業分野だけではなく、同業種内においても発展の非同時性が存在しているといえる。屋久島という観光地のなかで、集落や観光産業の業種間、または同業種のなかでも発展段階と、段階間の移行に影響する要因が異なる場合があることが明らかになった。

付

本研究は、大学院教育改革支援プログラム「文理融合リサーチ・マネジャー育成プログラム」、「総合科学研究科21世紀プロジェクト」の一環として行ないました。現地調査の際には、屋久島町をはじめとする行政機関、屋久島観光協会、屋久

VI. おわりに

Butler (1980) の提案した TALC に対しては、多くの観光研究者によってその問題点が指摘され、より多様で明確なモデルにするための条件や工夫が提案されてきた。後に、Butler (2009) 自身も、観光市場が多様化する中、観光地の発展過程が複雑になり、TALC のような単純なモデルだけでは説明能力が不十分になったと指摘している。

屋久島の事例においても、住民の関与以前に移住者による観光産業の発展が進んだことや、地域間、産業分野間、または同業種のなかでも発展段階がずれているという、TALC のモデルでは十分に説明できない発展過程の特徴や発展要因が明らかになった。その中でも観光産業関係者の認識が発展の要因として機能していることは注目すべき点である。発展要因を明らかにする上で関係者の認識分析は重要な役割を持つといえ、複雑な発展過程の分析に役立つだろう。さらに、関係者の認識に着目することは、今後の発展の方向性を分析することにも有効である。

また、屋久島では質の高い観光への志向性が強く、ただ単に数を増やすという観光の発展とは距離を置く姿勢が様々な点で窺えた。インタビュー調査では、ガイドや宿泊施設の増加を質の低下と捉え、淘汰されるべきであるという認識もみられた。このような認識の中では、観光者の需要の増加や観光産業の集積だけを単純に発展として扱うことができない。関係者の認識における発展の意味付けを考慮する必要がある、発展過程の分析に質的研究方法を用いる意義は大きいと思われる。

記

島町商工会から貴重な資料と情報をご提供頂きました。また、ガイド業、宿泊業などの各関係者の方々に多大なご協力を頂きました。深く感謝いたします。

注

- 1) 屋久島町からの提供資料による。
- 2) 屋久島観光協会へのインタビューによる。
- 3) 屋久島町からの提供資料による。
- 4) 屋久島エコツーリズム推進協議会のインタビューによる。
- 5) 資料により集落をまとめて表示する場合がある。同じ観光協会の資料でも、年度によってまとめ方が異なる。そのため利用した資料により図や表で示している集落の数が異なる。
- 6) 商工会会員名簿に記載のない施設はインターネット等の情報により分類した。
- 7) 屋久島リアルウェーブ (2011)：島の宿：宿泊施設
<http://www.realwave-corp.com/05b&b/01/index.htm>
 生命の島 (2011)：屋久島旅の宿 Link
<http://www8.ocn.ne.jp/~seimei39/yado.htm>
 屋久旅 (2011)：屋久島リンク集宿泊施設
- 8) 屋久島エコツアーの樹之香 (2011a)：屋久島の宿泊北部から空港周辺まで
<http://yakushima-kinoko.com/cn34/pg187.html>
 屋久島エコツアーの樹之香 (2011b)：屋久島の宿泊空港周辺から南部方面
<http://yakushima-kinoko.com/cn34/pg186.html>
- 9) 旧上屋久町には、永田、吉田、一湊、志戸子、宮之浦、楠川、榊川、小瀬田、長峰の9集落が、旧屋久町には、永久保、船行、松峯、安房、春牧、平野、高平、麦生、原、尾之間、小島、平内、湯泊、中間、栗生の15集落が該当する。旧上屋久町と旧屋久町は2007年10月に合併し、屋久島町が誕生した。

参考文献

- 鹿児島県環境林務部自然保護課 (2010)：『屋久島環境文化村ガイド 図解屋久島』屋久島環境文化財団。
- 鹿児島県保健環境部編 (1992)：『屋久島環境文化村マスタープラン報告書』
- 柴崎茂光 (2003)：屋久島における年間観光客数と観光需要特性の推計—離島におけるより精度の高い推計方法—。東京大学農学部演習林報告, 110, 1-25。
- 柴崎茂光 (2005)：屋久島における持続可能な観光のあり方について考える。農業と経済, 71-6, 39-48。
- 柴崎茂光・庄子 康・柘植隆宏・土屋俊幸・永田 信 (2008)：世界遺産管理における住民参加の可能性—鹿児島県屋久島の島民意向調査から探る—。地球環境, 13, 71-80。
- 関根久雄 (2005)：森への視線—屋久島における世界自然遺産と観光開発のゆくえ。島嶼研究, 5, 55-75。
- 田島康弘 (2003)：屋久島のエコツーリズム—ガイド業者に対する調査から—。鹿児島大学教育学部研究紀要 人文社会科学編, 55, 31-47。
- 中島成久 (1998)：『屋久島の環境民俗学—森の開発と神々の闘争』明石書店。
- 中島成久 (2007)：ガイドという職業の誕生—世界遺産登録後の屋久島における暮らしと観光—。異文化論文編, 法政大学国際文化学部企画広報委員会, 8, 131-149。
- JAIRO, <http://jairo.nii.ac.jp/0044/00003301> (2011年8月27日取得)
- ピアス, D. 著, 内藤嘉明訳 (2001)：『現代観光地理学』明石書店。Douglas Pearce. (1995)：*Tourism today: A Geographical Analysis, 2nd Edition*. Longman, Harlow [England]
- 藤木美帆. (2004)：エコツーリズムの人類学的研究—屋久島を事例として—。民族社会研究, 3, 85-128。
- 真板昭夫・比田井和子・高梨洋一郎 (2010)：『宝探しから持続可能な地域づくりへ—日本型エコツーリズムとはなにか—』学芸出版社。
- 松本富美子・田代正一・大西 絹 (2004) 屋久島におけるエコツアーガイドの実態の課題。鹿児島大学農学部報告, 54, 15-29。
- 渡辺悌二・海津ゆりえ・可知直毅・寺崎竜雄・野口健・吉田正人 (2008)：観光の視点からみた世界自然遺産。地球環境, 13, 123-132。
- Butler, R. (1980). The Concept of a Tourist Area Cycle of Evolution: Implication for Management of Resources. *Canadian Geographer*, 24, 5-12.
- Butler, R.W. (ed.) (2006a)：*The Tourism Area Life Cycle*

- Vol. 1 Applications and Modifications*. Channel View Publications, Clevedon/ Buffalo/ Toronto
- Butler, R.W. (ed.) (2006b) : *The Tourism Area Life Cycle Vol. 1 Applications and Modifications*. Channel View Publications, Clevedon/ Buffalo/ Toronto
- Butler, R.W. (2009) : Tourism in the future: Cycles, waves or wheels? *Futures*, 41, 346–352.
- Haywood, K.M. (1986) : Can the tourist area life-cycle be made operational? *Tourism Management* 7 (3), 154–167.
- Johnston, S. (2006) : The Ontological Foundation of the TALC. Butler 2006b, 7–28.
- Johnston, J.D./Snepenger, D.J. (2006) : Resident's Perception of Tourism Development over the Early Stages of the TALC. Butler 2006a, 222–236
- Lagiewski, R.M. (2006) : The Application of the TALC Model: A Literature Survey. Butler 2006a, 27–50.